

国内研修報告書

in 能登
2024. 9. 27 Fri-28 Sat



目黒女性団体連絡会

はじめに

阪神淡路大震災から 29 年、東日本大震災から 13 年目の今年の元旦に、能登半島地震が起きました。今年の国内研修は能登半島七尾を巡ねるという案が出され、9 月末に実施することができました。

目黒女性団体連絡会では、これまでも 4 回ほど東日本大震災被災県を訪れて、『女性と防災のあり方』や、懸念されている首都直下地震等への備えについて学んでいます。今年はこれまでの学習に加え、自助、特に共助・公助のあり方も学ぶために、被災地 NGO 協働センターの現地の活動を見て研修することになりました。防災はもちろんのこと、発災後の行動について、また指針や施策にどう生かしていけばよいのかを考えるためにも、支援者と当事者から具体的に学ぶことを主目的としました。

参加した 5 人にとって、現地を見ることが出来たのは本当に貴重な体験でありました。この研修体験をこれまでの目黒女性団体連絡会の実績と共に、広く区民のみなさんへお伝えしていきたいと思います。



2024 年度 目黒女性団体連絡会国内研修 記録

はじめに

目次

1. 2024 年度 国内研修報告・・・・・・・・・・ 3 ページ
2. 被災地 NGO 協働センター訪問&聞き取り・・・・・・・・ 4～7 ページ
 - ① センターの概要
 - ② 聞き取り内容
3. 七尾市内の現状視察・・・・・・・・・・ 8～9 ページ
4. 仮設住宅でのミニサロンの様子・・・・・・・・ 10～11 ページ
5. 国内研修に参加して（感想）・・・・・・・・ 12～17 ページ
6. 巻末資料

2024 年度 目黒女性団体連絡会国内研修報告

1. 実施日 2024 年 9 月 27 日（金）～9 月 28 日（土）
2. 研修先 石川県七尾市中島町小牧ヨー 40ー1
被災地 NGO 協働センター小牧集会所
3. 研修目的 能登半島被災地を訪問し、災害時の自助・共助・公助
のあり方について支援者と当事者から学ぶ
4. 研修内容
 - 〈1 日目〉 七尾市中島町の小牧集会所着
小牧集会所を見学し、運営スタッフの増島智子さん、被災者で集
会所運営に関わる石倉ともこさんに状況説明を聴く。
小牧集会所は支援活動のよりどころで、被災者の方々が物資を取
りに立ち寄り、支援のイベントなどに参加する所。また、ボラン
ティアを受け入れ、輪島市や奥能登の支援に通う拠点でもある。
実際に、イベント参加の家族が出入りしたり、支援物資が届く様
子や物資の提供コーナーを見学させていただいた。
 - 〈2 日目〉 仮設住宅訪問、テントを張ってミニサロンを開設する。
中島仮設住宅をたずねて被災者の方々と交流した。80 戸の団地
の脇にテントを張り、ミニサロンを開設して持参の茶菓子を準備し
た。仮設住宅の日常を垣間見る思いで話を聞いた。また、バルーン
アートやマジックを披露した。
早朝には七尾駅前の宿周辺を廻った。一筋入ると全く手がつかずで
車もつぶれたまま放置され、亀裂が入り傾いたままの家屋や店舗が
目立った。
5. 行程
 - 9 月 27 日（金）08：33 東京駅発 かがやき 521 号（金沢行き）乗車
13：38 のと鉄道 西岸駅着
14：00 小牧集会所着
 - 9 月 28 日（土）09：30 仮設住宅へ ミニサロン開設
12：30 研修終了
13：20 西岸発 金沢よりかがやき 510 号
18：28 東京駅着 解散
6. 参加者 日比野恵子 （めぐろジェンダー平等の会）
柏木恵美子 （めぐろ学習グループ連絡会）
堂垣内一花 （新日本婦人の会目黒支部）
堀田祐子 （目黒母親連絡会）
平林美枝子 （男女平等条例を推進する会）

研修1日目（ 27日 14時～17時 ）

被災地 NGO 被災センター訪問&聞き取り

1月の震災前は、小牧林業センターとして機能していた。木をふんだんに使った瓦屋根の大きな平屋の建物は、震災後はボランティアの方々の拠点になっていました。広いエントランスホールにはいろいろな支援物資の入った段ボールが積まれていた。

右手には大きな集会所があり、当日は被災者の方のために大学の先生が診察、アドバイスする「フットケア」が開催されていて、私たちも興味をもちました。また衝立で区切られた奥ではマッサージ等が行われており、乳児連れの家族の姿も見えた。

この部屋の周囲にも、援助物資がたくさん積み、中央にはカフェコーナーがあった。エントランスホールの左手には和室、キッチン、浴室、トイレ等があり、ボランティアの方々の宿泊施設となっていた。今回はこの和室で、支援活動について、お話をうかがうことができた。



聞き取り

集会室に案内していただき、支援活動をされている増島智子さん、ゲストハウスを運営されている石倉ともこさん（被災者）より話をうかがった。

自己紹介後、増島さんより七尾市の被害について伺う。
また、参加者から質問をしつつ答えていただく形で話が進んだ。

七尾市の状況について

1万5千件の被災 国道を通過して奥能登にいつてしまうのでさびしい
この協働センター（もともとは市のもちもので林業センターだった）では、手の届きにくいところに手がいくようにと思っている
手薄なところに情報をもらって入っている

被災地 NGO 協働センター立ち上がりから現在にいたるまで

この地域の方はみんな奥ゆかしい方たちで、支援の人がいっても、段取りをするのでそれから来てくださと言われるなど、なかなか家の中に入って支援することが難しかった。
やっと学生さんが庭のごみの処理などをさせてもらうようになり、関係ができくると、一人でどうしようと思ったと涙を流される方もいた
人の手を借りたくない気質があるように思う
自分におきかえても、いきなりパツと人に入ってほしくはないからそうなのかもしれない。
障子はりや網戸のはりかえなどできることをお伝えし、関係づくりをしていった。今は落ち着いてきて、支援物資というよりはだれかとお話をしたいというニーズがある。

中島地域の方の暮らしについて

もともとのこの地域の方の仕事としては、漁業、林業、家庭菜園など。50～60代で共働きで3世帯で一緒に暮らしているが、いままでは広い部屋だったが、一つの部屋で暮らしているなどの状況もある。
このセンターは19時まで行っており、仮設住宅で一人でうつになっちゃうという方が話にきたり、仕事帰りにほっと一息つきにきたりする。
海女さんをしていて、仕事復帰できず、避難生活をしている方もいる。
水害で飲食店のふる装備がだめになっちゃった。人口減少でお店再開できないという声もある。

仕事や家の状況について

仮設住宅に関しては行政がちゃんと補償してほしい。
七尾市の住宅にも輪島塗の建具がたくさんある。加賀百万石じゃないが、りっぱな家。被災した住宅の建具など日常的に使用してきたものを、すてることになってしまいとてももったいない。

ゲストハウスを仕事としてされていた方の話

先日家の解体の確認の打ち合わせを行ってきた。見積もりをとってもらった。
申請したのは7月で、そこから立ち合いになったのが先日だった。そこから1
か月半くらいで見積もりがでて、解体できる日は未定で連絡を待つしかない。

罹災証明は外側からみて決められるため、2次調査の申請をする必要がある
行政の文章に2次調査をしたら被害が小さくなってしまう場合もあるというこ
とが記載されており、そういうお知らせはだすなと言いにいった。

大規模半壊と判定されないと補助金がでない。

平日に仕事をしていたら、土日に申請したいけど役所がやっていないという場
合もある。

行政や国の支援、ボランティアについて

3月の議会では震災の話をすると言われた。6月ではいいよと言われた。

行政、国の支援が遅く、能登の復旧が遅れている。

海からも支援できたのではないか

七尾→金沢→奥能登という経路をとらなければならず、ボランティアが入りに
くいというのもある。

仮設住宅の消毒が必要なことをグループラインで流したら、市長との懇談会で
はあがってきてないと言われた。

避難所について

被災者の中には外国の方もいるが、外国語で案内されていたり、外国語が話さ
せるNPOも増えている。

田舎特有の問題としては

医療の問題・・・妊産婦さんは金沢までいかなければならない

過疎化を防ぐのであれば、医療の充実は必要。

普段ある問題が災害によって顕在化する。外国人や障害がある方とふれあっ
ていたら差別はしないだろうが。

合理的配慮ができる避難所もあった。

阪神淡路大震災のときには罹災証明はなかったが、声をあげることでかわるこ
ともある。

コミュニティがないところにお金をだそうなど少しずつ変わっている。

街づくり支援機構というのがあり、相談会があり、再建の道筋をたてる。

防災について

防災は友達作りからだと思う。

ここにこういう人がいるということを知ることが必要、助ける人がいて、助けられる人がいる。助けられる人がいて、助ける人がいる。みんなが避難できる避難所が必要。

また、避難所の自治は自分たちで行うことが良いと思う。

広島県の避難所で普段はコミュニティセンターになっているが、いざとなったら避難所になる場所がある。ドッグランがあったり、調理場も子供用、大人用があったり、キッズスペース、キッズトイレ、図書室、床、和室、シャワールームなど。

子どもも大人も会議に加わるそういう施設を作った。



七尾の被災状況

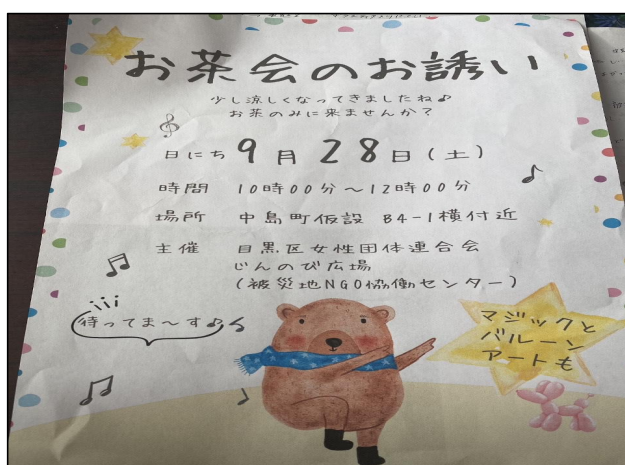
地震から9か月近くたっているが、全壊、半壊の建物もそのままのところが多かった。七尾で一番地震の被害が大きかった「一本杉通り」を歩いた。この通りは昔からの商店街で古い建物も多かったので、被害も甚大であったようだ。外部だけみただけでは、住めそうと思われる建物も、「危険」「落下物注意」あるいは「調査済み：この建物は使用可能」また、新しく大丈夫と思われる建物に「隣接建築物」による危険、立ち入る場合は専門家に相談」等、いろいろな張り紙が貼られた建物がほとんどであった。解体、改築が進んでいないため、寺院、墓地も数か所あり、墓石の上段がくずれ、ベースの台の上に横に置かれているのがほとんどであった。いつまでこのまま？





〈研修2日目〉 仮設住宅でのミニサロン

中島の仮設住宅前でミニサロンを行った。同じ集落ではなく、ばらばらの集落の方が集まっている仮設住宅であり、交流することが必要とのことであった。マグカップがないと話してくださった方に支援の方からマグカップの提供があったり、世間話などをして仮設受託の方どうしが仲良くなっている様子うかがえた。午後は小牧集会所で落語会などが予定されていたので、そちらへ行こうと思われている方もおり、先の見えない不安の中で、でかけて交流できる場があることの大切さを理解した。





2011 年の東日本大震災で、故郷の三陸海岸近くに住んでいた祖父母の家が流されてしまいました。私の実家も三陸海岸の近くですが、津波の被害は逃れました。地震大国日本で度重なる震災にまた見舞われた能登地方を研修で訪れることになり、悲惨な思いがよみがえりました。

今回は地震被害の大きかった、輪島、珠洲地方の南に位置する七尾市の「被災地 NGO 協働センター」を訪ね、お話をうかがうことができました。

9 月 21 日に能登地方は、また豪雨災害にあい、お忙しい中、私たちのためにお時間をさいてくださり、案内・説明をしてくださったチーフの増島さんにはお礼の言葉ありません。

七尾は、増島さんの説明では「援助が手薄なところで、地味に被害が大きかった地域」ということでした。

この NGO センターには関西、関東等いろんな地域から、若い男性ボランティアが来ていました。9 月の豪雨災害の後、男性ボランティアは、七尾のセンターから、人手が足りない輪島に通って泥だらけになりながら支援をしてらっしゃいました。

目黒区で防災フェアを開催しても、シニアが多く、目黒区の若い人は経済的にも自分の生活のことで一杯、防災は身近な問題として考えられないのかな？と思っています。

増島さんの言葉で「防災は友達づくりから」「迷惑をかけあうことの大切さ、助けられる人がいるから、助ける人がいる」はなかなか、今の目黒の日常の生活では実感することが少ないような気がします。

目黒区では町会・住区が地域のコミュニティの中心ということですが、それだけではなく、学校も一緒に地域を創生していく活動ができるようになればと思います。地域住民が身近な学校を良く知っておくことの大切さを思います。都市で災害が起きたら、まず、一番初めに学校が避難所になるのですから！目黒区では小、中学校の建て替えがこれから進んでいきますが、ほかの公的コミュニティ施設も同様、災害時は支援施設に転用できるように、初めのプランニングの段階で考えてほしいと思います。

2 日にわたって、七尾市内を歩き、震災で、全壊、半壊した建物、亀裂の入った道路、河川をたくさん目にしました。地震から 10 か月近く経っているのにほとんどが撤去されることもなく、修復されることもなく、そのままであることに驚きました。

東日本大震災の時、三陸の祖父母の家の周りは海岸から 1 キロ以上離れていましたが、津波で回りの住宅は全て半壊・全壊のまま残され、堤防があったため、海まで流されることもなく、数十メートル移動してとどまっていました。その後、数か月でほとんどが撤去され片づけられていました。被災地域への道路が通行でき重機等の運搬が可能であったことも大きいと思いますが、当時は国を挙げて復興に邁進した時期でした。しかし、その後、日本国中で多くの災害が頻発し、国も疲弊している状況がうかがえます。能登地方の復興の遅れをみるにつけ、私たちひとりひとりが声を挙げていくことが、復興の力になると信じたいです。

被災地 NGO 協働センター小牧集会所で七尾市で支援されているお二人の方からお話をお聞きしました。能登の支援は遅れているという話より、金沢駅から2時間以上電車でゆられて行く車窓の景色からもそのことがよくわかりました。ブルーシートでおわれた家々、その一軒一軒の方の生活があり、仕事があり、コミュニティがあるはずですが、仮設住宅では集落ごとになっておらず、ばらばらのところからのコミュニティ作りが必要であり、避難生活で仕事につけず、また、お話を伺った方はゲストハウスを運営されている方でしたが、家自体が建て直しが必要で、仕事はできない、自営業の方では人がいなくなり仕事ができない、そういう状況を現地に行き、見て、話をお聞きすることでよくわかりました。行政が早くからとりかかるべきことは、住民の生活の再建であり、それには人の支援を要するため、例えば罹災証明の発行、現地の調査、家の解体や再建などの従事に費用をだしていくべきだと思いました。

私たちが現地に行った1週間前には水害がおきており、輪島の方への思いをよせている声も多く、七尾市の方は自分も被災しているが、それでも被害が起きている地域に心をよせて、心を痛めていました。

みなさんの生活の困りごとを行政へとつなげる役割や、直接支援する役割を被災地 NGO 協働センターの方達は担っており、重要な役割をされていると思いましたし、動きを見守っていく必要があると感じました。

防災に関して、こういった災害において日頃の問題が顕在化するという話もありました。医療体制はどうか、避難場所の状況はどうか、あらためて目黒区の防災の状況を確認する必要があると感じました。

今回参加させていただきありがとうございました。

能登半島地震から 9 か月の被災地を訪ねる。

日比野恵子

今回、元旦の大地震から 9 か月の能登半島被災地を訪ねるという、たいへん貴重な機会を頂きました。現地を見るということがどれほど大きなことかを実感するとともに、訪ねて初めて目の当たりにした状況をどのように報告すればよいのか、暫くは途方に暮れました。現実が重く大きすぎて、言葉にしてしまうと見て聞いたことが固定化し軽くなってしまふような気にもなりました。

今回、私たちが見た風景は一言でいうと、打ち捨てられた地方の家並みでした。9 か月経ってもほぼ地震の当日のままの能登の町。しかし今回、その地で「防災は友だちづくりから」として、人と人を繋ぐ作業を進めておられる活動を垣間見ることが出来ました。

輪島市や珠洲市や能登町の奥能登に比べれば、それでも被害は少ないであろう七尾市に開設された一つの支援センター、小牧集会所を私たちは訪ねました。そこには地域の人々が出入りし、運営に関わる方もおられたり、被災者の一軒一軒を訪ねては寄り添った支援をしようと試みる、物資を届ける、さらにボランティアの方々がそこから輪島に泥出しに通う、あるいは私たちのような外来者を受け入れて被災者に繋ぐ、、、という、まさに支援活動の「拠点」となっている場でした。そのコーディネイトは阪神・淡路大震災以降、東日本大震災、熊本水害被災地へと即、駆けつけては支援をしてこられた、被災地 NGO 協働センターのスタッフの増島智子さんが中心で、七尾市の被災者でありながら運営にも関わっておられる石倉智子さんとのお二人のお話を聞くことが出来ました。疲れ果てて心が折れている人々を訪ねては糸口を見つけることから始めていること、能登の方たちの遠慮がちな奥ゆかしさを越えて繋がりを広げようとしていることを聞きました。それは並大抵のことではなく、物質的な支援やインフラ等の復興もさることながら、一人一人の顔を見ながらの「血の通った支援活動」の積み重ねそのものであり、その活動があつてこそ、災害によって分断された人々が繋がりながら「復興」に向けて歩んでいけるのだということが、現地に行つてよくわかりました。その活動をこの地でこつこつと進めておられる、そのお話を聞いて本当に心を打たれました。

2 日目に訪ねた仮設住宅では、しつらえたテントカフェに年配の方たちが集まってこられました。何気ない会話からは簡単には心の内は見えない。でも抱えた痛手やこの先の不安はどれ程のものか。すべて失って、この仮の住まいから、どうやって生活を再建できるというのか。仮設住宅のたたずまいやお話を聞きながら、それこそ行政の手＝公助が入るべきとも思いました。

それにしても阪神・淡路や東日本大震災では「復興」や「絆」が叫ばれ、ボランティアも押し寄せるように通ったのに、能登半島地震では国も自治体も手を引いているとしか思えません。ボランティアも圧倒的に足りておらず、過酷な状況だということもよくわかりました。こうして頻発する災害の度に、私たちの被災地に思いを馳せる心が緩むのも悲しいことですが、共助だけでなく、目黒区も区として現地に赴いて、支援のあり方を学び、生かしてゆくことが重要だと感じました。

幾重もの助け合う関係づくりが大切だということ、血の通った関係にしてゆくこと、それを今回の研修で学んだと思っています。

平林美枝子

元旦の大地震からの復興途上にあるなか、記録的大雨に襲われた石川県能登地方。まだ行方不明の方々の捜査が続く時期に、研修と称して現地を訪問することは可能なのだろうか。“二重被災”とも言われる厳しい状況に直面している人たちや支援活動をされている方々にご迷惑をおかけするのではないかと気をもみましたが、被災地 NGO 協働センター様のご快諾を得て研修旅行が実現しました。被災地では多くの住宅屋根にブルーシートが張られ、人が住んでいる気配のない家屋が見受けられました。完全崩壊してしまった建物も目にしましたが、外観からそれほど災害の爪痕がみられない住宅でも、柱がずれたり外壁にひびが入って土台が痛んだりした建物は危険で住み続けられないそうです。災害の復興に向けては、家の中に堆積した土砂のかき出しと家財の処分、被災した建物の鑑定と解体工事に伴う家の中の整備、災害廃棄物の処理など膨大な作業と多くの課題があることを目のあたりにしました。

復旧・復興は関係自治体と事業者が連携してしっかり取り組んでほしい、また多くの人が手を差し伸べたいと願う中、ボランティアの募集、マッチング、受け入れと人員の配置など組織化の複雑さ、難しさは想像以上のものだと思います。その中で被災地 NGO 協働センター小牧集会場では、神戸・淡路大震災からボランティア活動に従事し、東日本大震災、熊本震災等で活躍された増島智子さんを中心に各地から人が集まり、懸命に活動されている姿がたいへん印象的でした。活動の準備ができて、ボランティアは被災地で被災者との信頼関係を築いてからやっとお手伝いさせてもらえというお話から一般的な業務活動とは違い被災者と外部の人々の絆があり、そこから生まれる人間関係がスタート地点であることを知ったのは大きな学びでした。まさに災害時の支援は行政からの一方的なものではなく個と個がつながることで機能していくものです。災害時、支援される方々も支援を受ける方々もこの繋がりが大前提であり、そのためには日ごろのお付き合いはもちろんのこと、被災後の避難所や仮設住宅でも人がおしゃべりして、声を上げることができる場があることが非常に重要です。地元でのコミュニティが存在し機能している能登と比べ、規模が大きい一方、繋がりが希薄の上、外国人を含む個々の多様性に富んだ目黒区において、被災時にどのようにだれも取り残さない対応を実現するのか、この課題を私たちはしっかり認識する必要があると感じました。また、災害直後には支援を必要とする人と、支援活動の元締めである自治体、そして全国からの支援ボランティア間でのシームレスな意思疎通など望むこともできず、被災者に寄り添った支援のために、その間に立って受ける側と提供する側の調整がなければ機能しないことは明らかなです。被災地での NGO の働きは血液を心臓部から体内に届けるための循環器のような仕事。目には見えませんが、この方たちがたいへん重要な役割を果たしていることを今回の研修で目の当たりにしました。私たちも地域の市民団体と日ごろから連携体制を確認し合い、いざという時に力を合わせて機動力を発揮するための施策を持つ必要があると強く思います。一方、災害時の避難・支援生活で、女性の活躍の場が限られていると聞くことの多い中、被災地 NGO 協働センターの増島智子さんが現場の責任者として見事なリーダーシップを発揮している姿はたいへん印象的でした。「阪神淡路大震災から関わられた多くの被災地でのご経験が役に立つのでしょうか」と申し上げたところ「支援は経験値よりも想像力です」とおっしゃられたことが深く心に残っています。

帰りの車窓から見渡せる黄金の稲穂畑と光る海。息をのむように美しい能登の風景をみながら、一日も早く被災者の方々が心安らかに暮らせる日常が戻ることを祈願して七尾を後にしました。

七尾市の仮設住宅カフェで交流

堀田祐子

ローカルな七尾線の車窓から屋根にブルーシートのかかった家がぽつぽつと見えます。西岸の駅前にも崩れたままの住宅が取り残されています。

NGO 協働センター小牧集会所では、大学のボランティアで健康サンドルのイベントが開催され、被災者の方が測定やマッサージコーナーも設けられており、赤ちゃんを抱っこした若いパパとママがきていました。第一印象は雰囲気の良いロッジのようです。広い玄関にペットボトルの水が届き、奥の倉庫に手分けして積みみます。壁には全国から送られてくる食料や支援物資を被災者が持ち帰るように並べてありました。私たちが見学をさせてもらう間にも被災者の方と言葉を交わし、てきばきと指示を出す忙しそうな増島さんと被災者でありゲストハウスの再建中である石坂智子さんから七尾の状況をお聞きしました。

七尾では1万5千棟が被災し、倒壊しています。増島さんは能登の住民の方を奥ゆかしいと話します。駆け付けた当初はアンケートやリストをもって1軒ずつ回っても「まだボランティアさんは大丈夫です」となかなか家に上げるのをためらう人ばかりだったとか。何をどう頼んでいいかわからないという住民とつながりを作り、ちょっとずつ入れるようになったそう。伝統的な広い家屋住まいが大規模半壊などで住めなくなり、親戚と暮らしたり、仮設で暮らすようになると、息が詰まりストレスは相当です。将来への不安も大きく、仕事帰りに集会所によって、19時までおしゃべりしてから家に帰る人もいるという話やお母さんが初めてアパートに一人暮らしになり鬱になるなど、暮らしの悩みや避難生活の大変さを受け止め、寄り添うボランティアの活動に頭が下がります。

翌日の仮設団地でのカフェ開催にあたり、注意事項として被災者の皆さんに「お困りごとは何ですか」などといきなり来て聞くのは失礼だからやめてほしいと話され、被災者に寄り添いながら支援をする増島さんたちの気づかいを感じ、阪神淡路大震災時からボランティア活動をしている筋金入りのプロフェッショナルとして、私たちのような素人と被災者もつないでくださりありがたいです。

輪島市や珠洲市では豪雨災害による断水が続き、七尾を拠点に泥だしの学生ボランティアが夕方、泥だらけの格好で道具や車を洗っていました。パルシステムや学生ボランティアの拠点として機能しています。普段はインスタント食品だけれど昨日は七尾の住民の方がバーベキューをしてくれたと喜んでいました。自分よりもさらに大変な奥能登の人を気遣い、泥だしのボランティアを応援しているのでしょう。

集会所から駅に戻る道すがら、大きく壁が剥がれたり、壁が傾き、ばらばらに崩れたままの納屋などもそのままの家屋が並び、道路も補修は一部でひび割れたままのところもあります。建て直したばかりの新築の家は1つだけ、カキ小屋の看板だけが残されていて店も住民の姿もありませんでした。公費解体が始まったものの需要に追いつかない現状があります。

増島さんは七尾から輪島に行く道はさらにでこぼこで高速だと気分が悪くなるので、下道の方がましとっていました。悪路でも七尾から輪島に行く方が金沢市から行くよりも早く着くのですが石川県のボランティアに登録すると金沢からく

るルートしかないということも、人手不足と作業時間が短くなって支援の遅れにつながっているそうです。

翌日は仮設団地に伺い、テントを設営して、カフェを行いました。神戸から来たボランティアの女性3人と一緒に机とイスを並べポットのお湯でコーヒーや紅茶をいれ、目黒から持って行ったお菓子も食べていただきます。チラシを見て、10時前から、ぱらぱらと避難者の方が来て、「目黒から来ました」と軽く自己紹介し、あとは住民の方同士でくつろいでおしゃべりしていました。

22人が参加、席がすべて埋まったところで柏木さんのマジックがはじまり、宙に浮くコーラーカップや色が変わる花など楽しいおしゃべりは、大変盛り上がりしました。期待していたお子さんは一人も来ませんでしたが女性たちにはバルーンアートの花も人気でした。

七尾市で被災して仮設に入居した森田勝さんとおしゃべりをしているうちに「仮設住宅の中も見てみるか」と声をかけていただき、部屋に上がらせていただきました。プレハブ造りの1人暮らしの部屋は4・5畳のワンルーム、玄関を入るとIHのコンロ、流し隣に冷蔵庫、電子レンジ、洗濯機、部屋には作り付けの棚があり、テレビがおかれ、ベッド、小さな卓の上にはノートパソコン、トイレと風呂は別々だそうです。外が暑い中でコンパクトな部屋はクーラーが効いて涼しく、入居してまだ10日足らずということで部屋は物もあまりない状態でしたが手狭でした。1人当たり4・5畳と決まっており、2人世帯3人世帯の少し大きい仮設の間取りもありました。森田さんは、被災当初は埼玉の体育館に避難したのち、富山県のアパホテルに入っていたといい、「体育館のときは大勢人もいて、ケータイの盗難にあい大変だったが、ホテルは朝はビュッフェでよかったよ。弁当はまづかった。ここへきて、やっと落ち着いた」と入居を喜んでいました。東京から来た若い男性ボランティアの青柳さん（28歳・社会人6年目）にパソコンの初期設定をしてもらい、これで北海道の友人にメールが送れると喜んでいました。食事は三食宅配の弁当だと冷蔵庫の中の昼の弁当も見せてくれました。

もともと能登の家は古い建具や畳で暗い家屋が多く、仮設の壁や天井は白すぎてまぶしくて寝られないという声もあったそうです。プライバシーが確保されている半面、住民同士の接点もあまりなく、カフェの開催はご近所同士で顔を合わせたりできよかったと思いました。

私たちの組合の仲間が輪島市で木造の応急仮設住宅建設に行っています。また何回か倒壊したブロック塀の撤去にもうかがっていますが7月までは、輪島の朝市の倒壊家屋がそのまま残されており、一向に進まない復興を歯がゆく思っていました。追い打ちをかけるような豪雨災害で地震の被害を免れた建物が土砂に流され、停電断水、入居したばかりの仮設住宅も浸水など甚大な被害にあわれ、「心が折れた」といった声も耳にしました。

能登の震災の後も宮崎県沖の南海トラフ地震の心配もあり、震災や自然災害が多い日本では、常に備えが必要であり、自治体、もっと小さなコミュニティでも日頃からどんな人が暮らしているか特に高齢者や障がい者、小さな子がいる世帯などにいざというときに速やかに支援が行われるのか、自分の身近や自身に置き換えてますます心配になりました。

2024 年度 国内研修報告書

発行 2024 年 12 月 17 日

目黒女性団体連絡会 中島みち子